

六夕 磐城時報

編輯人 阿田 弘成
印刷所 磐城印刷局
印刷部 磐城印刷局
電話 二一五
代印所 磐城印刷局
代印部 磐城印刷局
電話 二一五
電話 二一五
電話 二一五

共産黨事件の起訴者 石城出身は五名

東大法科生もある

全日本に跨る共産黨事件の起訴者。山代吉宗(一九)は元唯一の女性として活躍した石城炭礦の飯場頭で舊労働黨警城郡小名濱町生れ丹野せつ(二)城支部書記長であるが、石城地會の研究に没頭し思想の變化(八)に關しては昨報の如くである。下田正男(一)が、同事件、即ち三・一五並が思ふやうでないため茨城縣助は石城郡飯野村大字小泉生れで、四・一六事件に連座した石城川町に逃れ、同町大字山根大和當時日立製作所の職工を勤めて地方關係者には丹野せつの外松田ミシンの會社の販賣人として眞つたもので山代の片腕となつて島清美(二五)山代吉宗(二九)千面目に仕事に従事する傍ら昨年動いてゐたものである。

工費二百萬圓の 古河斜坑起工式

坑内作業は機械化 下野古河所長談

石城郡好間村古河炭礦では既報の如く五日午後十時から工費二百萬圓を投ずる第二新斜坑の起工式を行つた。本社は、後十時頃平澤前魚とめ方で柿本(二四)大井川幸隆(二四)大内(二二)佐藤清長(二二)吉野運之助(二二)等と會合選舉闘争の協議中を捕はれ取調への結果、果松島清美のみ水戸に送られ他は釋放されたものである。千葉成夫は石城郡四倉町字仲干葉(一五)の二男で當時東京帝國大學法學部二年生で、大正十三年磐城中學卒業後水戸高等學校を経て東大に入學した秀才で前途を誤つた事は非常に遺憾とさ

植田町々道 改修工事實現

植田町では警察署側より大字小嶺に通ずる町道中岩間、小嶺間、魚である關係出會か最後經濟的

第二校職員が 毎月一回母の會

平町第二小學校では教化員に關し過般職員會で協議の結果、費八千六百八十圓中四千三百圓を授訓方面に亘り實績を擧げる最初のものに變更を加へねばならぬものになり、毎月一回母の會なるものを、毎月曜日校庭に國旗を揚げ、全校生徒が整列して國歌合唱、尚ほ毎月第一日曜日母の會と定め生徒各自が親の恩を追憶し、母の手傳ひ及び母に慰安を與へる日とし朝禮は四日より母の日は三日より實施した。

縣當局の淺見で 漁業組合憤慨

水試場の豫算削減 縣會に大舉猛運動

本縣では沿岸四十里を有する各關係からも釣獲し得るだけ釣つ種漁業家の指導をかね試験をなした事はないが常に異動しつ、ある小名濱水産試験場費回游の急進なるこの種漁業を追の明年度豫算に對しても例の緊ふとするにしても乗込漁夫の減縮節約の關係から大斧鉞を加へ員はその釣獲上に大影響を來す即ち本年度同場豫算七萬七千五百圓のみならず豫算に制限されて百七圓に對し約二萬圓からの削減の遠洋の試験をなし得ずその減をなしをり、なかつく最も半がやうやくの試験では到底満多きは漁獲試験費三萬八千七百七十圓なる成績を擧げ得ないばかり三圓に對し一萬四千圓を削減して少なくとも減額の三倍以上である、これは主として試験船の損失をまねぐにひとしき結果警城丸の各漁期に於ける乗組員を來すので延いて當業者の受くを半減しそれに伴ふ諸經費を節の打撃をも考慮するに於てはそ位とすべきで決して漁獲本位とし如何に緊縮とはいへ縣當局のすべきでないとの見地から斯の淺見には今更ながらあきれてゐる如きに出でたるものであるが他の縣下の漁業者は來るべきの試験と異なり如何に大漁群に縣會には大舉出縣猛烈なるこれ會するともその魚族が果して漁が復活運動をなすべく各漁業組合し得るや否や一例を示さば本合が主体となり寄り／＼協議中縣水産業中の大宗である鱈の如き大群に會するとも釣獲して見るにあらざるは食氣の有無を判明し得ないものであるのと廻游村より原釜附近に於て秋期發火大演習を行ふ。

妻の復縁を拒まれ 一家皆殺しを企つ

空俵で放火

石城郡植田町農木田長太郎方軒下に空俵を積んで四日午後十一時頃放火したものであり植田署で犯人捜索の結果同町建具職小松啓一(二二)の所爲と認め逮捕し取調へた結果左の如き事實を白日した。

失業者の爲め 授職相談

石城地方における失業者は勞働者のみに止まらず各地の事業不振から有識階級者の失業者が多くなり平職業紹介所に毎日一人平均職を求めにくるものあり、これを紹介斡旋には係官も層一層の努力を拂ひつゝあるも殆んど全國的の事業の縮小にたゞられ求職者の希望を容認すること出來ず折角求めに來た人々を氣の毒にも満足と與へることを得ない始末で困りに困りきつてゐるに鑑み同所では各炭礦長、銀行、會社、學校その他郡内の有力者を招きこれ等失業者の善後策を講じ盡力を仰ぐこととなり、近々平町第一小學校に會合を催す等目下夫れ／＼準備を進めてゐる。

理髮試験場覗き

本縣では今年から實施することになつた床屋さん(理髮)の第一回試験は四日から向ふ三日間の豫定で郡山公會堂において執行中で第一日は學課試験であつたが従來腕さへよけりやアで學課方面のことなんかでんでんり見すへくと本方からこつぱびつてゐると親方からこつぱびつてゐると言つてゐた連中である、第一回だけに提案者の方で手加減がわからなかつたせもあるが連中にとつては意外の難問題ぞろろひで、お手のものだけに頭髪だけは今の時さんま然とやけにテカ／＼させて集まつた大僧小僧に年増、娘ッ抱えて豆鐵砲を喰つた鳩ばつばのやうな格好まではよかつたが、終つてから小使が掃き集めて來たほごの中に「オヤカタハナモオシヘテクレマセンデシタ」とあり、一同大笑ひ。

